

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじおG.O.G.

「永瀬清子の光を受けて」 vol. 12 二〇二二年二月二十日

イトハルカナル海ノゴトク

小林章子 (RSKアナウンサー)

伊藤正弘 (RSKアナウンサー)

白根直子 (赤磐市教育委員会熊山分室学芸員)

小林 この時間は、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。

白根 こんにちは。

小林 二月は永瀬さんの誕生日であり命日である二月十七日、紅梅忌ということで、昨日は赤磐市にある永瀬清子さんの生家で紅梅忌があったんですね。実は伊藤さんが取材をしたんです。

伊藤 そうなんです。紅梅のつぼみがふくらみはじめて咲いているものもあって、その中で永瀬さんの詩を聞きますとなんだか感慨深いものがありましたね。

白根 おっしゃるとおり二月は永瀬さんを慕う方々にとって特別な月です。さきほどおっしゃったように永瀬さんの誕生日で命日が二月十七日ということで、昨日もそうした意味で永瀬さんのことを偲ばれたと思います。

小林 さて、今日はどんなお話でしょうか。

白根 今日は、永瀬さんの理解者のひとり、谷川俊太郎さんとの交流をご紹介したいと思います。まずは、谷川さんが永瀬さんの詩のなかで「一番最初に感動した」とおっしゃる詩をお聴きください。

イトハルカナル海ノゴトク

イトハルカナル海ノゴトク

我ハ渝(カ)ラヌモノニシテ

微生物ノタダヨフマニ

我が内ニ光ルモノアリ消ユルモノアリ

ユラメキタダヨヘド我ハマドハジ

流レ去ルトモ我ハ忘レジ

還リキタル潮流ノ巨イナル環

我が血脈ノゴトク

我が胸ニ巻ケルナリ

黒クシテアタタカナルモノ

寒冷ニシテ奔キモノ

雪フリキタリテ消ユルココロニ

過ギユクモノ我ニ溶ケヨ

我ハヲミナノ涙モテナベテノコトヲ記憶ス

去リシモノハ去リシナラズ

注ギシモノハ永久(ト)ニアリ

我ハ渝ラヌモノニシテ

太古ヨリツツク海ノゴトク

カナシミコソハハルカニテ

塩ハ徐(オモムロ)ニ濃クナリユクナリ

『永瀬清子詩集 現代詩文庫1009』思潮社 一九九〇年二月

伊藤 生命の移り変わりを感じました。自然の偉大さみたいなものがうかがえましたね。

白根 ありがとうございます。そんな感じを受けます。この詩は、漢字とカタカナで書かれ、しかも文語体なので、少しとつつきにくいと思われるかもしれませんが。どんな詩かという点、私は海のようにそこにあります。そして多くの女性が悲しみのために流す涙を海水にたとえて、深い悲しみであるうとも、私はそのすべてを海のように受け止めて忘れないと、永瀬さんご自身も含め女性たちの抱く悲しみを詩にしています。

小林 そういう詩なんです。そもそも谷川俊太郎さんと永瀬さんは、親子ほどの歳の差ですが、出会ったきっかけは何だったのです

ようか？

白根 谷川さんが永瀬さんの詩に出会ったのは、戦前に出版した二番目の詩集『諸国の天女』（河出書房 一九四〇年八月）がきっかけでした。詩を書き始めた谷川さんが、哲学者で法政大学総長も務めた父・谷川徹三さんの本棚にあったこの詩集を薦められて読んで、永瀬さんの詩の中で「一番最初に感動したのが」、この「イトハルカナル海ノゴトク」です。谷川徹三さんと永瀬さんは、戦前から宮沢賢治の会などで交流があり、戦後は湯川秀樹やアインシュタインが提唱した世界連邦運動を通じて交流がありました。

小林 そうなんです。実は、二〇一六年、白根さんのお取り計らいがあつて、私は、谷川俊太郎さんに、永瀬清子さんについてインタビューさせていただきました。その時の音声をお聞きください。

永瀬さんの詩に関しては、ずっと若い頃から読んできていまだに飽きない。もう世界的な女性の詩人ですね。

自分の女性としての実生活にはつきり根を下ろして詩を書いている。日本語の大きなうねりみたいなのがあの詩にはあつて。それを持っているのが永瀬清子という一人の女性だということですね。

小林 谷川さんは、永瀬さんの詩を若い頃から読み続け、高く評価していらつしやいますね。

白根 谷川さんは、常々永瀬さんを「世界的な詩人で世界的な女性」とおっしゃり、永瀬さんの詩を英訳して世界の人に読んでもらえる

ことを、かねてから訴えていらっしやいます。そのため、永瀬さんの朗読と英訳の朗読を収録したCDを製作され、連東孝子さんが永瀬さんの詩を英訳した本の出版にも協力してこられました。

小林 谷川俊太郎さんがこの詩を一番好きだとおっしゃる理由は何だと思われませんか？

白根 永瀬さんの肉声が聞こえてくるような「日本語の大きなうねり」だと思います。谷川さんは、生前最後の出演となった永瀬さんとの朗読会の中で、文語体で書くことの難しさについてふれ、「イトハルカナル海ノゴトク」を「文語体というものの力を非常に感じさせる詩だと思うんです」と高く評価し、「日本語の大きなうねり」について、「たぶん現代詩が今一番失っているものだという気がしています」とも指摘されています。

小林 この詩には、谷川さんのおっしゃる「うねり」「リズム」そして、「漢文」の読み下し文のような雰囲気がありますね。

白根 そうなんです。永瀬さんの詩は漢文的といわれることもあり、子どもの頃から古文や漢文を深く学んでいた賜物だと思います。谷川さんは、「イトハルカナル海ノゴトク」を「読んでいると気持ちいい」とか「旧制高校の学生たちが朴歯の下駄をカランコロンならして朗読していた雰囲気ここに残っている」ともおっしゃっています。

小林 私も朗読してみますとリズムがあつて、読みやすいなというのを感じました。また「漢文的」といいますと、たとえば「我ハヨミナノ涙モテナベテノコトヲ記憶ス」というのは、最初どういう意味

だろうと思いましたが、白根さんのご解説でそういうことだったのか：と。「ヨミナ」というのは女性のことですよね。永瀬さんは、海のような広い心で女たちの涙のすべてを受け止めてくれていたんだなと感じました。

ここで、ふたたび谷川俊太郎さんの永瀬さんについてのインタビュをお聴きいただきます。

決して永瀬さんは、自分のそういう女性としての生活を呪ったりはしてなくてそこに素晴らしい喜びや美しさを感じていた方なんです。

生活と自分の書く詩がちゃんと一致して、それで力強いリアリティを持った詩人というのは、残念ながら女性の永瀬さんしかいないっていうふうに思っています。

白根 谷川さんは、永瀬さんの「スケールの大きな詩」が、生活の中から生まれていることに注目なさっています。永瀬さんは、悲しみを詩に書いても、ただ悲しいだけで終わらせず、谷川さんがおっしゃるように「女性としての生活」に「素晴らしい喜びや美しさを感じて」いて、マイナスをプラスにしていくような生き方を選び取り、詩に書いていったんです。谷川さんは、永瀬さんの一生と詩の特徴を「永瀬清子さんのちゃぶだい」という追悼詩に書いていらっしやいますので、こちらも読んでいただきたいです。

小林 永瀬さんが詩をつくっていたのは「ちゃぶだい」だったとい

うことが印象的な詩ですね。

白根 「ちゃぶだい」は、「生活と自分の書く詩がちゃんと一致して、それで力強いリアリティを持った詩人」の象徴です。谷川さんが、「イトハルカナル海ノゴトク」を「最初に読んで感動した詩」として今も機会あるごとに紹介されているのは、その詩に永瀬さんの肉声があり、今を生きる私たちにも共感でき、時代を超えた人の心の動きを捉え、そこに生活と詩の一致をご覧になっているのではないかと思います。

最後に吉井郷土資料館の展示をご紹介します。この展示では戦前から現在まで廃校になった学校も含め赤磐市の三十四校の校歌を紹介しており、その中には永瀬さんが作詞した四校の校歌もあります。(新型コロナウイルス)まん延防止等重点措置にともない三月七日以降の開館を予定しています。くわしくは、赤磐市山陽郷土資料館のホームページでご確認ください。

小林 永瀬清子さんが作詞した四校の校歌、すてきですね。

伊藤 そうですね。

小林 うらやましいですね。

伊藤 聞き比べてみたいですね。

小林 ぜひホームページでご確認のうえ三月七日以降の開館予定ということですのでお出かけいただきたいと思います。白根さん、ありがとうございます。

白根 ありがとうございます。

※記載されている情報は、二〇二二年二月二十一日現在のものです。

〈参考文献〉

谷川俊太郎「永瀬清子さんのちゃぶだい」『夜のミッキーマウス』新潮社 二〇

〇三年十二月

『資料集―永瀬清子の詩の世界 第六集』赤磐市教育委員会熊山分室 二〇一九年三月